

「り」に就いて

田 中 み どり

一

。……朝露に 仁保敵流花乎 毎見 念ひは止まず 恋し繁しも (萬葉 十九 4185)

。梅の花 伊麻佐家留期等 散り過ぎず 吾が家の苑に ありこせぬかも (萬葉 五 816)

。梓弓 末は寄り寝む 麻左可許曾 人目を多み 奈乎波思尔於家礼 (萬葉 十四 3490)

。木の暗に なりぬるものを ほととぎす 何か来鳴かぬ 伎美尔安敵流等吉 (萬葉 十八 4053)

。……春花の 佐家流左加利尔 秋の葉の 尔保敵流等伎尔 出で立ちて 振り放け見れば……

(萬葉 十七 3985)

上代に於いて、「りへあり」は、「見る」「今」「現」「時」「盛」などとともにあらはれ、〈現存〉〈存続〉をさし示すと見られ、後さらに〈完了〉をも表す助動詞となる、と考へられてゐる。さらに、

。長き夜を 君に戀ひつつ 不生者 咲きて散りにし 花ならましを (萬葉 十 2282)

には、

「り」に就いて

。富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り。 (伊勢物語 九段)

に至る〈存在〉の意味が、

。銀も 金も玉も 何せむに 麻左礼留多可良 子に及かめやも (萬葉 五 803)

には、

。とがつた(てゐる) 鉛筆

と同じへ状態を表す語尾〉的な意味があり、同じ「連用形+あり」が融合して「エリ」の形になったものではあれ、「りへあり」の表す意味は、存在詞「在り」から、助動詞「あり」(てゐる、である、た)、状態性を表す語尾「あり」(てゐる、た)まで、広範囲にわたるのである。

たゞ、上代の「りへあり」を検討した結果、次のやうな事実が認め得ると思ふので、以下にそれを述べる。

これは、平安期の、和歌を示すにあたつての「よめる——とよむ」「よめる——とよめり」への方向付け、ともなるものである。

「未然形+バ」の条件句に「りへあり」のある場合、

。玉の緒を 沫緒に搓りて 結^{結べらば}有者 在りて後にも 相はざらめやも (萬葉 四 763)

。絶えずゆく 明日香の川の 不^{よこめらば}逝有者 故しもある如 人の見まくに (萬葉 七 1379)

。今のごと 心を常に 念^{思へらば}有者 まづ咲く花の 土に落ちめやも (萬葉 八 1653)

。あせか渦 潮干のゆたに 於^{おもへらば}毛敵良婆 うけらが花の 色に出めやも (萬葉 十四 3503)

。天の川 橋渡せらば 波志和多世良婆 その上ゆも い渡らさむを 秋にあらずとも (萬葉 十八 4126)

総て、「もしも〜であつたならば」〈反実仮想〉の表現になつてゐる。一般に、反実仮想には、「ませ(ば)……まし」「まさか(ば)……まし」「せ(ば)……まし」「〜(ば)……まし」の形が認められてゐるのであるが、これら総て、「現実には洑緒に搓つておくことなどできない、強く玉の緒を結んでおきたい」「明日香の川は絶えずゆくもの、決してよどむことなどない」「不安で心しづかにしてゐることなどできない」「ゆつたりとしづかな氣持であなたを思つてゐることなどできない」「天の川に橋を渡すことなどできない」といふ氣持の上に成り立つてをり、また、そのことをこそ強く言はんが為に、事実と反することを仮にたとへたものであつて、〈反実仮想〉の一態と考へられる。「やも」「くに」「を」など、反語や「〜であるのに、それなのに」の意の言葉で後句が結ばれてゐるのは、この反実仮想「らば」に照応するものである。

終止形「りへあり」にはそれで終止した主述全体を、更に動詞「見ゆ」が包んでゐるものがある。後世、連体形(準体句を構成する)となるものである。

a 潮瀬の波折を彌黎麼遊見ればび来る鮪が鰭手妻立てり、見ゆに都麻陁氏理彌喻(紀87歌謡)

b 久方の月は照りたりいとまなく海人の漁火は等毛之安敵里見由としあへり見ゆ (萬葉 十五 3672)

は、今日の前に現れ出でた光景を描写したものである。このやうに主述全体を「見ゆ」が包んでゐる形のものは、

c 白妙の衣の袖をまくらがよ安麻許伎久見由波立つなゆめ 海人漕ぎ来見ゆ (萬葉 十四 3449)

d わが背子を吾が松原よ見渡せば海人少女ども多麻藻可流美由 五讀列る見ゆ (萬葉 十七 3890)

の如く、「りへあり」を分出しない動詞だけのものもあることは注意されてよい。これら a・b・c・d の表すものは、「りへあり」を分出することによって、特に変はりはない。へS-P の現存性がよりはつきりするまでである。「見る」「今」「現」「時」「盛」などとともにあらはれる上代の「りへあり」は、へ現存をさし示すものと考へることに誤りはない。が、その本来は、かかる「りへあり」を分出しない動詞だけのものにも等価であるに過ぎないもの、とも言ふことができる。

ところで、この「へS-P 見ゆ」形式の「S-P」は、主格の助詞「の、が」も含まず、又 P は連体形ならぬ終止形をとる、即ち、準体句をは構成せず、全く「S-P」でもつて終止してゐる形になつてゐる。「S-P」を主語とし「見ゆ」を述語といふには、あまりに断絶が深い。ここに、

e 田子の浦ゆうち出でて見者ま白にそ富士の高嶺に雪は降りける 見れば (萬葉 三 318)

を考へてみる。「見ゆ」は表出されてゐないが、a・d の「……見れば、……見ゆ」と全く重なる世界であらう。ある風景を眺めた所、そこで予期せぬ光景にぶつかり、それに心を奪はれた感動を表現するのが、この「……見れば……見ゆ」形式である。見ることに意欲を用ゐ、そこに存在の証しを見た萬葉人であつたればこそ、表現の類型化であらうが、「……見れば」は表現されないこともあり(b・c)、また、e に見る如く、「見ゆ」は表出しなくとも、十分その意味は尽くせる。詮じつめれば、「……」こそ必須、即ち、「……」に出会したその感動こそが重要なのであつて、「……」に出会つたこと「見ゆ」は必ずしも表出しなくともよい、とも言へる。事実、萬葉の自然詠は、概ねその形になつてゐる。即ち、「へS-P 見ユ」は、「へS-P」。それが見える。」ほどの意味であ

つて、〈SIP〉と「見ゆ」とは対々の重みを有ち、「見ゆ」はその感動を今一度観入する形で、自身が現場に立ち合ふことを表明するものである。なればこそ、〈SIP〉は準体句になるまでもなく、寧ろ、これだけで十全な主述關係を有つた一文を完結したのであつた。であつても、〈SIP〉見ユ」と表現される以上は、〈SIP〉のうちに、「それが」に向かふだけの客体化は、あるのだければならない。それを言表するのが、「りへあり」ではなかつたか。即ち〈SIP〉見ユ」は、一旦は対象のあり様を「SIP」と叙述し、翻つて、言語主体者自身が主体的立場に立ち、観入的に「それが見える。」と言表するものであり、「りへあり」は〈SIP〉を

〈SIP〉
が在る
アリ。

と判断し、更に客体化するに向かふ働きをになひ、それを言表してゐる語である、と見るのである。（「ガ在ル」が内的思念の中での存在〈判断〉を表すといふ時、それは「デアル」に転換する。）^⑩ かやうに考へるのも、前に述べた如く、〈SIP〉見ユ。」に於いて、〈SIP〉が「りへあり」を分出するものと、動詞のままのものとは、等価であつて、「りへあり」を必ずしも分出せずとも、その意味にとくに變はりはない、といふ所より、である。「りへあり」を分出するものとしなないものとが等価であるとは、分出されたその「りへあり」が、対象の意味より作用的陳述の卓越したものである、といふことにほかなるまいからである。「りへあり」は〈現存〉を表すといふが、その〈現存〉といふのも、〈SIP〉の事実の存在・現存（↓判断）といふことでもあつて、本来、述語動詞のみに属するものではない。

。物思ふと 人に見えじと なまじひに 常念弊利、
ありそかねつる
在曾金津流 （萬葉 四 613）

「り」に就いて

「物思ひをしてゐると人に見られまいと、無理強ひしていつも思つてゐる。（それで、）生きた心地がしないことだ。」となると、第四句までを原因とし、続く第五句に結果を述べるといふ構造になる。前の「S-P」＋あり＋見ゆ」が、「りへあり」で括られる句を主語とし、「それが」と承けて述語「見ゆ」にかかつていつたのに対し、この場合は、原因結果関係のその前文（原因）を承けて、「それで」と後文（結果）にかかつていくものである。これには、

粟島に 漕ぎ渡らむと 思へども 明石の門波 未^{いまださ}佐^{わけり}和來 （萬葉 七 1207）

のやうに、結果を表す後文（それで、渡れない）を欠き、余韻とするものもある。さらに、

吾が里に ^{大雪降り}大雪落有 大原の 古りにし里に 降らまくは後 （萬葉 二 103）

・大伴の 見つとは言はじ 茜さし 照れる月夜に 直^{ただに逢へりとも}相在登聞 （萬葉 四 565）

「吾が里に大雪が降つてゐる。（だから、）大原の古里に雪が降るのは後のことだらう。」（第二句まで〓根拠。以下〓生産。）、「あの方にお逢ひしたとは口に出しますまい。明々と照つてゐる月夜に、直接お逢ひしましたとしても。」（第二句まで〓生産。以下〓根拠。）では、根拠生産関係の前文（根拠）を承けて、「（それ）だから」「（それ）であつても」と後文（生産）にかかつていく。（以下、煩雑をいとはず訳を付するのは、これまで十分に「りへあり」の意味が表出されてこなかつたからである）。これには、

・我がやどの 芽^{萩花咲けり}子花咲有 見に来ませ 今二日だみ あらば散りなむ （萬葉 八 1621）

萩の花が咲きました。（だから、それを）見に来て下さい。

・我がやどに 月^{月おし照れり}押照有 ほととぎす 心有らば今夜 来鳴きとよませ （萬葉 八 1480）

月が照つてゐる。(だから、)ほととぎすよ、心があるなら今夜来て鳴きとよまして下さい。

。春日野に 咲きたる萩は 片枝は いまだ含めり 未含有 言な絶えそね (萬葉 七 1363)

片方の枝はまだつばみのままです。(だから、)どうぞ便りを絶やさないで下さい。

。朝戸を 早くな開けそ あぢさはふ 目の乏しかる君 今夜來ませり 今夜來座有 (萬葉 十一 2555)

朝戸をどうぞ早く開けないで下さい。めつたにお逢ひできないあの方が今夜おいでになつてゐる(のですから)。

のやうに、生産の後文が、願望・希求・命令表現であるものもある。

。官にも 許したまへり 縦賜有 今夜のみ 飲まむ酒かも 散りこすなゆめ (萬葉 八 1657)

官でもお許しになつたのです。——今夜だけ飲む酒でせうか。いいへ、後にも飲むことができます。——

(だから、) 散らないで下さい、決して。

のやうに、間に他の句が入り込んだ場合とて、同じことである。また、

。行く川の 過ぎにし人の 手折らねば うらふれ立てり 裏觸立 三輪の檜原は (萬葉 七 1119)

。後つひに 妹は逢はむと 朝露に 命は生けり 命者生有 恋は繁けど (萬葉 十二 3040)

は、根拠生産の後文(生産)、「だから、手折る人——逝いたあの人が居てほしい。」「だから、いつか必ず妹に逢ひたいものだ、逢はせてほしい。」を欠き、余韻の内に詠嘆する響きを有つものである。

以上は順接確定の場合であつたが、逆接確定の場合、

。いつまでに 生かむ命そ おほかたは 恋ひつつあらずは 死ぬるまされり 死上有 (萬葉 十二 2913)

「一体いつまで生きてゐる命であらうか。おほよそ恋に苦しんでゐずに、死んだ方がまだ（のに）。」（第二句までⅡ生産。以下Ⅱ帰結。）があり、

。妹が為 ^{命残せり} 壽遺在 刈り薦の 思ひ乱れて 死ぬべきものを （萬葉 十一 2764）

「妹の為に命を残しておきました。刈り薦の乱れるやうに思ひ乱れて、死んでしまひさうでしたのに。」も、後に「だから、妹と常しへに共に居たい。」あるいは「だのに、妹は居ない。やはり死ねばよかつた。」といふ後文（生産）を予想させるものとして、詠嘆に了はつてゐる。

。春山は 散りすぎぬとも 三輪山は ^{いまだ含めり} 未含 君待ちかてに （萬葉 九 1684）

は、「君に逢ひたい」といふ氣持を裡にこめ、

。沖つ波 寄する荒磯の なのりそは 心の中に 疾跡成有 ^{疾となれり} （萬葉 七 1395）

は、「だからどうぞ名を言はせて下さい。」といふ希求さへもが虚しい、ただ詠嘆するほかない状態であり、かくして、

。我が背子を 今か今かと 出で見れば 沫雪 ^{沫雪降り、} 零有 庭もほどろに （萬葉 十 2323）

「沫雪が降つてゐる（ことよ）。」の詠嘆に成り了はる。

以上、終止形について見て来たことをまとめれば、

(1) 〈S-P〉+アリの一文が主語となつて「ソレガ」で承け、述語にかかつていく。

(2) 〈S-P〉+アリの一文が、原因結果・理由帰結・根拠生産の前文となつて、②「ソレダカラ」「ソレダノニ」で承け、後文に続いていく。

(3) (2)の後文すらも続いてゆかない、内に沈潜した在り方「コトヨ」の詠嘆。

といふことになる。以上のことから言へるであらうことは、終止形の「りへあり」には、〈SIP〉の陳述の「確認」の意識、換言すれば、〈SIP〉を今一度客観的に〈判断〉して総括する意識がある、といふことである。その本来は、かやうに、主述関係、原因結果・理由帰結・根拠生産関係の前文をおさへる所にあつたのではあるまいか。その意識が忘れられると、「りへあり」は、総括して後に続くことを忘れ、唯に〈判断〉を表すのみとなるであらう。そして、一般の「りへあり」は、対象的意味〈現存〉〈存続〉のみかへりみられることとなる。

「りへあり」の連用形は、「き」「けり」につづく例のみを見る。「真毛君尔如相有」(十一 2813)

「愛等思篇來師」(十一 2558)は「現実にくしてある(た)」「現存」を、「不通有之」君には逢ひぬ(十一 2988)

「尔保敝理之梅此雪尔」(十九 4287)は「くしてある(た)」「存続」を表すが、

……百枝楓の木 こちごちに 枝させる如 春の葉の 茂きがごとく 念有之 妹庭雖在 持ありし 妹庭

雖有 世の中を 背むきし得ねば…… (萬葉 二 213)

……新た世に 共に有らむと 玉の緒の 絶えじい妹と 結而石 事者不果 思有之 心者不遂 白妙

の たもとを別れ…… (萬葉 三 481)

。まよねかき 下いぶかしみ 念有之 妹が姿を 今日見都流香裳 (萬葉 十一 2614 一書)

などは、「前はかうであつたが、現在はいかゝつた。」といふ所から、「き」「けり」と結びついて「完了」になつた

「り」に就いて

る意義となる。これらは、逆接の後句・述語で打消・前の思ひが現在くつがへされるといふ内容につゞくもので、単に「てゐた」といふ完了態を表すのみならず、「現に、確かに」であつた、それなのに」といふ語感を有つ。それは、「りへあり」に於いて「さういふことが現に存在した。」と、一旦確かめる所から来るものであらう。

。さゝ波の 志賀さざれ波 しくしくに 常にと君が 思ほせりける 所念有計類 (萬葉 二 206)

。かくのみに ありけるものを 猪名川の 奥を深めて 吾が思へりける 吾念有來 (萬葉 十六 3804)

「現実念ひとは異つてゐたのだ(のに)」につながつていくこの「り(へあり) 十き・けり」は、前の未然形の「反実仮想」を想起させる。それは、「りへあり」の陳述の確かめといふ性格に由来するものであるであらう。

三

前の

。物思ふと 人に見えじと なまじひに 常に思へり、 常念弊利 在曾金津流 ありそかねつる (萬葉 四 613)

の第四句を「常の面」おもへりと訓む説(岩波日本古典文学大系)があつて、「物思ひをしていると、人に見られまいと思つて、なまじひに、普通の顔つきをしていようと、とても出来ないことである。」と解釈しながらも、「この歌、ナマジヒニのかかり方がはつきりせず、わかりにくい。」と註する。この「面」おもへりは、

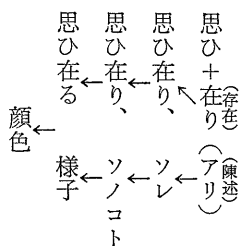
。對天方無禮峻面 おもへり 敬利無久 (四四詔)

。於是天皇有不悅之色、おもへり (応神紀)

。大樹臣^{タマヒシ}神色^{オモヘラヒ}不變、抜刀斬之。
(雄略紀)

。太子懷恨、忍不発顔^{オモヘラヒ}。
(武烈前紀)

「顔つき。顔色。思ひが顔にあらはれること」で、「思フの連用形＋アリ」そのものを語源とする。大系本の解釈がわかりにくいものとなつたのは、そこから転じた名詞形にこの「念弊利」をとつてしまつたことにあつたのであるが、この「オモヘリハオモヒアリ」がかやうに「顔色」の意を表すに至る経緯は、



で、そこに至るべき意味は、「りへあり」終止形に見た「客観的に判断し、総括する働きを有ち、ソレで承ける」所に明らかであらう。類似のものに「思はく(思ふこと)」がある。加行延言「思はく」は、「思ふ、それ」「思ふ、その点」「思ふ、そのこと」から、「思ふこと」といふ名詞に転じて行つたものである。なほ〈存在〉「在り」の對象の意味は保ちながら、同時に〈陳述〉「あり」の作用的陳述より、かかる意味にも展開するこの「あり」は、恰も加行延言「く」に匹敵するかのやうである。「りへあり」自身には、本来、「ソレ」とつづくべき意味はない。存在詞・助動詞としての〈存在〉〈現存〉〈存続〉〈完了〉の對象の意味がなほ強く、作用的陳述〈判断〉の意味はあくまでも付随的である。しかし、主述關係、原因結果・理由歸結・根拠生産關係の前文を「りへあり」

が括る時、そこに「ソレガ」「ソレダカラ」「ソレダノニ」の義が介入し、述語・後文へとつづけてゆく機能を有つたのであつた。その点、加行延言が、その身の内に「ソレ」を含み、どのやうな句格にもなり得、また、後につづいてゆくことを本来とすること、と異なる。「S-P+Aリ」は、あくまでも、そこで一旦断止する働きの方が露はである。

四

ところで、かやうな「りへあり」が、加行延言「く」と同じ働きをしてゐる場合が、今ひとつある。和歌を示す場合の「よめる——とよむ」の「る」である。

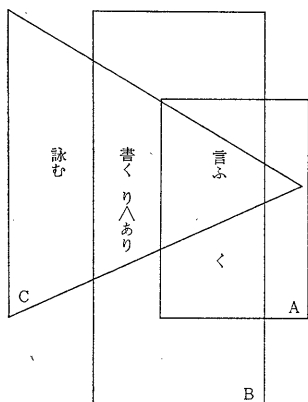
古今集詞書の比較的長いものや二文以上から成るものでも、それまで述語に「けり」が分出してゐたにも関はらず、「けり」のない「よめる」で結ばれることを一般とする。勿論、古今集の中にも、「よみける」20例・「よめりける」2例、その他「よみてたてまつれる」4例・「たてまつれる」1例・「つかうまつれる」1例、「よみてかけりける」1例・「よみていだせりける」1例・「よみてやれりける」1例・「つかはせりける」3例・「たてまつれりける」1例も含まれるが、「かきける」2例・「^(お)をくりける」「つかはしける」「たてまつりける」「つかうまつりける」など、「よむ」以外は大概「けり(る)」で結んでゐるのと対照的である。これは、和歌を示すにあつての特殊な用法と見られる。

この古今集詞書に特徴的な「よめる」形式は、伊勢物語などの「よめる——とよむ」「よめる——とよめり」の

前句にあたる。^{参考1}「よめる——とよむ」「よめる——とよめり」は、和歌の前後を同じ動詞（類似の他語であつても

よいのだが）で結ぶ点、漢文訓読文の「いはく——と言ふ」と同じ形であり、次の表・図に掲げた竹取物語・伊勢物語・土佐日記より抽出した所の、口頭言語・筆録言語・和歌を引用する表現の在り方、即ち言語表現が口頭言語「言ふ」から筆録言語「書く」へ、更に創作表現「詠む」「く」へと移行するに伴ひ、恰度加行延語「く」を覆ふやうにして「りへあり」が表出されることより、「りへあり」はこの場合、「く」の交替形態となつてゐると考へられる。^{参考1}

	口頭言語	言ふ	言はく	言	ふ	書	く	詠	む	あ	り
筆録言語	言ふ	文に言はく	言へり	書く	詠む	詠めり	あり				
和歌	言ふ	言へり	書く	書けり							



A 口頭言語
B 筆録言語
C 和歌

「り」に就いて

「よめる——とよむ」が「いはく——といふ」と異なる点は、「よめる——とよめり」のやうに、後句にも「りへあり」を分出するものがある、といふことである。とりわけ土佐日記は、後句が更に「といふあひだに」「といひつぞ」「といひてゆくあひだに」「といひてありければ」「といひてぞなきける」のやうに続いていく場合を除いて、必ず「よめる（いへる）——とよめり（いへり）」の照応を為してゐる。これは「りへあり」が、一方では存在の對象の意味をいまだ失してはゐない助動詞であつた、また一方では、作用的陳述よりする本来の働き「判断し客体化してソレと總括する」が忘れられ、陳述の確認の意味のみ残つてゐた語であつた、といふ所にその理由を求めることができる。

加行延言は、「それが客體化した對象界を客觀しながら」る主体的な位置に立ち、引用文を明らかにする作用的な意味を「く」のみにになはせ、自身が語る立場をはつきりとつたわけではなかつた、そして、「そこを指される如き思想上の場所を設ける言葉」であつたに對し、「りへあり」は、そこを指される以前の存在「在り」を語源としたこととも大いに関係があらう。「く」は、その作用性の故に、引用文のしめくくりにも用ゐられ、「是以先豆先豆天下公民之上乎慈賜久、『大赦天下。……天下諸国今年田租復賜久』止詔天皇大帝乎衆聞宣。」（三詔）の如き、全く引用を指し示すだけの語にもなり、「りへあり」は、「とよめり」の如く、存在を表す語としても働いたのであつた。土佐日記に於いては、「よめる」の「る」の本来の意味が全くかへりみられず、助動詞「りへあり」の照応の意識のみがあつた。既にこの當時、上代にみられた如き「りへあり」の機能は全く忘れられてゐた、といふことの証であらう。

なほ、「よめる」が連体形であるのは、準体言構成の意識であることは、言ふを俟たない。

「よめる——とよむ」の「る」をかやうに考へる時、一般の連体形にも、〈S—P〉を判断し客体化して総括する意識を見出だせないか、と考へることとなる。

〔所〕生^{ウム}を^{ウメル}字米流、成^{ナル}を^{ナレル}那禮流といふが如き時に、此字を加^ヘて、所生所成と書る例なり、此格^ノの言、餘^{ホカ}もみな然り、是^レを萬葉には、生有^{ウム}成有^{ナレル}などと、有字^ノを添^ヘて書り、（本居宣長『古事記傳』訓法の事）

従来「所」字は、〈S—P〉が連体修飾格に立つ場合、即ち關係代名詞的な所に使はれる時、「りへあり」の連体形「ル」でもつて訓まれる。上述の所よりすればこれは、Pを終止形に訳し、ソノで承けて体言につづけたい所である。かやうに訳し得る例を、

・秋^{秋の田の}田^{穂向きの寄れる、}之^{穂向きの寄れる、} 穂向^{片寄りに}乃^{こと}所^{こと}縁^{こと} 我は物思ふ つれなきものを （萬葉 十 2247）

「秋の田の穂の向きが寄る、それが片方にばかり靡いてゐるのである、恰時そのやうにひとすぢに私はあなたのことばかり思つてをります。あなたはつれないのに。」の類似表現の歌、

・秋^{秋の田の}田^{穂向きの寄れる、}之^{穂向きの寄れる、} 穂向^{異所縁}乃^{君に寄りな}所^{言痛くありとも}縁^{（萬葉 二 114）}

の第三句の「所」に見出だすのである。よく似た表現であつて、2247歌を根拠に、一般にこの第三句もカタヨリニと訓じられてゐるのであるが、「所」字があるため疑問も提出される所である。第二句にも「所」字が出てきて、「秋田之穂向乃所縁」と「乃」字が入つてゐる故に、〈秋^S田^S之穂向^S縁^P〉は準体句を構成してゐることがわかり、「所^ル」はその総括と見られる。さうして今度は、「秋田之穂向乃所縁」「秋の田の穂の向きが寄る、それ（その

こと)」が「一まとまりになつて主語を構成し、述語「異所縁」にかかるわけであるが、この述語の「所」字を、一般的訓みに従つて、第二句と同じく「ル」と訓めば如何。「秋の田の穂向きの寄れる カタヨレル」——この時、第三句までは連体修飾格に立ち、第四句の「君」にかかつていく、といふことになる。

秋の田の穂向きの寄ることは、一方にかたよつてゐる、ソノヤウニ(私に)ひとすぢに靡いてゐらつしやるあなたのお心に従ひたいと思ひます。たとひ人言がうるさくありませうとも。

かうなるのではないかと思ふ。

2247も同様にカタヨレルと訓めなくてはならないが、その時は、靡いてゐるのは私であることになり、「吾^我」の述語が「物念^{物思ふ}」であるから、同語反復的に過ぎる。カタヨリニとした方が意味世界は広くもなり、又さうであつたらこそ、第二句まではほとんど114と同じ表記をしながら、第三句に「所」字が入らなかつたのもあらう。114・2247の第二句までが序詞であるといふ時、それがかかる言葉は「カタヨル」(カタヨリニではなく)であつたのであらう。

。紫草能^S 尔保敝類妹^P (萬葉 一 21)

。山振之^S 尔保敝流妹^P (萬葉 十一 2786)

「紫草」「山吹」が匂ふ、そのやうに美しいあなた」も同様である。

序詞は比喩であるから、ソノヤウニは再び被序(述語)に還つていく、といふ特殊な在り方になつてゐるが、それにしても、へS「P」を終止形で結び、その主述全体を今一度ソレと括る機能をは、「ル」が有つてゐたのでなけ

ればならない。外形は似てゐる

。橘乃 尔保敝流香 (萬葉 十二 3916)

。橘乃 尔保敝流苑 (萬葉 十二 3918)

などの「ル」にも、今は「匂ふ、その」の訳をあてることとなる。「橘が匂ふ(てゐる)、その香〔苑〕」。而して、本論一の最初の歌、

。……朝露に 匂へる花を見ることに
仁保敝流花乎 毎見

も、「朝露に匂ふ(てゐる)、その花を見ることに」と訳すこととなる。

最後に、已然形については、前に見た終止形の第二例、原因結果・理由帰結・根拠生産関係こそが、一般の已然形の果たすべき役割になつてゐたのであつて、「レ」は、それが活用形の形として成つたものである、と見られる。因つて、「りへあり」の已然形「レ」については、特筆すべきものはない。命令形「レ」も又、「ゝしてゐよ」といふやうな意味に解されるものであらう。

右の論中に引用した書物は、『萬葉集』(塙書房)・『日本書記』『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『古今和歌集』(岩波日本古典文学大系)・『古事記傳』(筑摩書房『本居宣長全集』第九卷所収)に拠る。

註

① 拙稿「存在詞「あり」に就いて」(『現代社会と人間の諸問題』所収。昭和五十三年三月)。

「り」に就いて

- ② 森重敏先生『日本文法通論』なほ、理由帰結關係に適合する例は見出たせなかつたが、同じ延長上のものとして掲げておく。
- ③ 加行延言は、夙に、森重敏先生によつて、「主體的立場よりそれが客體化した對象界を客觀しながめてゐる働き」を有つものであることが、明らかにされてゐる。（「加行延言の考察」、『國語國文』第十五卷第六・七號所収。昭和二十年十一月。）
- ④ 森重敏先生。前掲論文。

参考

I

五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人に、ほいにはあらでものいひわたりけるを、む月のとをかあまりになん、
ほかへかくれにける。あり所はきくけれど、えものもいはで又のとしの春、むめの花さかりに、月のおもしろかりける
夜、こそをこひて、かのにしのたいにいきて、月のかたぶくまで、あばらなるいたじきにふせりてよめる

在原なりひらの朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

（古今和歌集十五 747）

……うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのふと明くるに、泣く／＼歸りけり。

（伊勢物語四段）

あづまの方へ、ともしとする人ひとりふたりいざなひていきけり。みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その
河のほとりにかきつばた、いとおもしろくさけりけるをみて、木のかげにおりゐて、かきつばたといふいつもじをく
のかしらにすへて、たびの心をよまんとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞおもふ

（古今和歌集九 410）

……その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしぞ思ふ
とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙としてほとびにけり。

(伊勢物語九段)

Ⅱ「いはく——と言ふ」形式・それに準ずるものを次に掲げる。

〈口頭言語〉

a かぐや姫のいはく——と言ふ。(竹取)

b 竹取泣く／＼申す——と申す。(竹取)

c₁ 又、人の申すやうは——と申す。(竹取)

c₂ 問ひ給ふことは——と問はするに(竹取)

c₃ 世界の人の言ひけるは——と言ひければ(竹取)

c₄ かちとりのまうしてたてまつることは——とまうしてたてまつる。
言(土佐)

d₁ 答へての給ふやう——とのたまふ。(竹取)

d₂ きくひとのおもへるやう——とひそかにいふべし。(土佐)

〈筆録言語〉

a' 文を見るにいはく——と言へることを見て(竹取)

b' 返事書く。——と言へり。(竹取)

c' うち泣きて書く言葉は——と書きおく。
(を)(竹取)

「り」に就いて

d' 文に申しけるやう——と申して (竹取)

〈和歌〉

e₁ 歌よみ加へて持ちていました。その歌は——と言へり。 (竹取)

e₂ うたをぞよめる。そのうた——とぞいへる。 (土佐)

f 人の国にありきてかくうたふ。 (土佐)

g₁ か詠み給ひける歌の返し箱に入れて返す。——とぞありける。 (竹取)

g₂ これをかくや姫聞きて、とぶらひにやる歌——とあるを、よみてきかす。 (竹取)

g₃ ある所へいひやりける——とありけれど (伊勢)

g₄ 歌ありけり。——とよめりければ (土佐)

g₅ うたあり。そのうた——。 (土佐)

a 切れて続く(「言ふ、そのことは」)

b 切れる性格をそのまゝ露出した終止形

c 続く性格を表はし、主格

d 切れて続く(唯に形式副詞に了はらず、係助詞ハをも含んだ形)

e 「よめる、そのうた」

f 「かくうたふ」
(全く分析的)

g 「あり」

なほ、竹取物語には、「いはく——と言へること」、「く」と「り」の混用例がみられるが、「いはく——と言へり」が「いはく——と言ふ」と「言へる——と言へり」「言へる——と言ふ」の中間形態とみることは、できない。その場合は、「る」も「り」も全く完了の助動詞化してゐることとなり、とりわけ和歌の前句の「よめる」の説明ができなくなるからである。

次に、伊勢物語・土佐日記に於ける和歌の前句と後句の対照表を掲げる。

伊勢物語 (岩波日本古典文學大系)

前句		後句	段
よむ	とよむ とよめりけり ※	87 87 87	
よみける	とよみけり ※	18 77 67	
よめる	とよむ とよみけり とよめたりけり とよめり ※	93 80 16 5 82 81 4 107 82 39 9 40 115 84 64 69 124 92 79	

「り」に就いて

<p>よみてやる</p> <p>よみてやりける</p> <p>よみてやりけり</p> <p>よみてやれる</p> <p>よみていだしたりける</p> <p>よみて奉りける</p>	<p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>とて</p>	<p>76</p> <p>24</p> <p>133</p> <p>102</p> <p>38</p> <p>46</p> <p>99</p> <p>104</p>
<p>いへる</p> <p>いひやる</p> <p>いひやりける</p> <p>いひおこせける</p> <p>いひおこせたる</p> <p>いひかけける</p>	<p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>とてやりたりけり</p> <p>とありけり</p>	<p>70</p> <p>21</p> <p>11</p> <p>25</p> <p>137</p> <p>20</p> <p>116</p> <p>47</p> <p>111</p>
<p>かけり</p> <p>かきつけける</p>	<p>※</p> <p>※</p> <p>※</p> <p>とて</p>	<p>69</p> <p>114</p> <p>21</p> <p>24</p> <p>87</p>
<p>かきつぐ</p>	<p>※</p> <p>※</p> <p>とて</p>	<p>96</p> <p>2</p> <p>109</p>
<p>やりける</p> <p>おこせたり</p>	<p>※</p> <p>※</p> <p>とて</p>	<p>96</p> <p>2</p> <p>109</p>

おこせたりける
奉りける

※
とよめりけり

78 10

※

とよむ
とよみけり

27 23 98
63 83

とよめりけり

7 9 19 19

とよみてやりけり

68 123 19 19

とよみてやりけり

107 103 62 31

といふ

21 23 24 31

といひけり

58 59 62 62

といひけり

65 124 134 62

といへり

21 22 23 24

といへりけり

14 22 32 43

といひやる

122 14 105 107 50

などいひいひて

49 23 14 105 107 50

と聞えけり

69 49 23 14 105 107 50

と書く

134 69 49 23 14 105 107 50

「り」に就いて

いへるうた いへりけるうた	となむよめる とぞいへる	1	1
かきていだせるうた になひいだせるうた よめる	※ とぞいへる といひてありければ	1	1
いへる よめりける	とぞよめる といへれば とぞいへる となむいへる となん といひつつ ※ ※ といふあひだに となんありければ とや ※	1	1
うたあり。そのうた うたをぞよめる。そのうた あやしきうたひねりいだせり。そのうたは よめり。	※ とぞいへる ※ ※	1	1
	※	2	

<p> このうたをひとりごとにしてやみぬ。 うみをみやれば かなしきにたへずして また、あるときには いまひとつ またかくなん </p>	<p> ※ となんうたよめる といひてぞなきける </p>	<p> 1 1 1 1 1 1 </p>
---	---	---

(昭和五十四年十一月三十日)